

書 評

Kenneth R. Hall, *Maritime Trade and State Development in Early Southeast Asia*. Honolulu: University of Hawaii Press, 1985. 368p.

東南アジアには豊富な資源があり、加えて交易を通じて外国との接触とがあったにもかかわらず、何故東南アジアで権力の集中が起こらなかったかということの問題意識として、著者はこの本を書いている。この設問に答えるために、著者は紀元直後から14世紀までの間に登場した国々を分析してゆく。原初期の小仲継港(第2章)、扶南(第3章)、Srivijaya(第4章)、Sailendra(第5章)、Angkor(第6、7章)、11～14世紀の諸港(第8章)、14世紀のジャワ(第9章)が中心的に討議されている。

著者は分析にあたって、地勢学的モデルを設定し、それを基準にして各国の規模と安定性を論じている(第1章)。モデルは独立した小河川が多数流れ出す海岸型(riverine system)と大きな沖積平野を持つ平野型(river alluvial system)の二つである。前者の最も典型的なものは原初期の小仲継港である。ここでは同じような条件を持つ河口集落が多数あるなかで、特定のひとつだけが中枢的な位置に育ってゆくことの難しさを指摘している。こうした状況のなかでは大きな権力の集中やその安定的存続は望みえないという。

一方、river alluvial system では港としての性格は前者のそれと同じであるが、それとは別に沖積平野上で広がるより複雑な在地の交易組織とそこでの稲作というものがあって、その権力集中はより大きく、また安定したものに育つという。この例としてSailendraやAngkorを検討している。ただし、こうしたriver alluvial system の場合においてさえ、東南アジアの王達は決して絶対的な権力の保持者ではなかったという。王は沖積平野上に多数存在した在地首長の一人にしか過ぎず、ただ、彼等を代表して地域全体の繁栄を計る司祭のような、極めて象徴的な存在にしか過ぎなかったという。

Srivijaya はこうした観点からすると、riverine system と river alluvial system の中間にあるとしている。これは沖積平野こそ持たなかったが、森林物産産地の内陸の首長達と密な関係を保っていたからだという。

14世紀のジャワになると、こうした王の性格が変わってゆく。東南アジア全体に以前よりははるかに広範に外部経済の影響が及んでくるからである。例えば、港では中国の銅銭が多量に使用されるような事態が起こってくる。そして、これに呼応するかたちで、Majapahit の王達は国内の諸組織を変えにかかる。例えば、製塩、製糖、交通関係等といった非農業セクターの在地首長からの引き離しと、それらに対する王の直接支配がすすめられる。香料貿易の承握にも力が注がれる。しかし、これらも結局は不徹底のうちに終わっている。海岸に勢力を張り出した外国勢力を押さえきれずに Majapahit は崩壊するのである。

この本に対しては歴史学者の間からは、John N. Miksic のような手きびしい批判も出ている。しかし、私のような門外漢にとっては好著に見える。東南アジアの伝統的な国家群の成立の基盤が一本の筋道の上に判り易く示されているからである。ただ、ecologist の目から見ると著者のモデルにはいささかの疑問を感じる。むしろ、モデルは perhumid と monsoonal、すなわち汀線にしか住めない世界と内陸まで侵入できる世界の違いとして対置させた方がよいのではなかろうか。

(高谷好一・東南ア研)

Gerald G. Marten, ed. *Traditional Agriculture in Southeast Asia: A Human Ecology Perspective*. Boulder and London: Westview Press, 1986. 358p.

本書は、東南アジアの伝統農業の諸側面、すなわち土地利用、営農技術、経済的機能、社会的背景等とそれら諸側面間の相互関係について分析し、伝統農業の持つ継続性、安定性のメカニズムを明らかに